



松沢病院発！精神科病院の COVID-19 感染症対策

齋藤 正彦, 針間 博彦,
杉井 章二 編著
新興医学出版社
2021年7月発行 150頁
本体価格 4,000円+税

2019年12月に中国武漢で発生したCOVID-19感染症は、またたく間に世界を席卷し、大規模な行動制限の実施や、奇跡的な速さで開発されたワクチンの接種実施にもかかわらず、書評子がこの原稿を書いている2021年7月18日現在も、まったく収束の見通しが立たない状態にある。日本社会全体が、このCOVID-19感染症により非常に大きな影響を受けたなかで、平常時に社会的に弱い立場に置かれ、経済的にも支援が行き届いていない層の人々は、そうでない人々より、一層大きな影響を受けている。そのなかでも、精神科病院に入院している人々は、精神疾患のためマスク着用などの身を守る行動が取れなかったり、抗精神病薬の長期投与などにより身体的な脆弱性を抱えていたり、いわゆる「精神科特例」により、他科に比べて医療やケアを担当する医師や看護師の数が少なく抑えられていたりといったさまざまな要因のせいで、非常にリスクが高い人々といえる。こうした意味で、精神科病院におけるCOVID-19感染症対策に関する成書の出版が望まれていた。

本書は、東京都立松沢病院が、COVID-19感染症に対して、精神科病院としてどのような対応を行ってきたかということ、そしてそれに加えて、同院が、公立の精神科病院として、COVID-19感染症流行下の東京都における精神科入院治療において、どのような役割を担ってきたかをまとめたものである。

平時においては、松沢病院が、東京都における精神科入院治療に果たしている大きな役割は2つあり、1つ目は、夜間休日における精神科救急体制の一翼を緊急措置入院が可能な4病院の1つとして担うこと、2つ目は、他の精神科病院では対応が困難な身体合併症を抱える精神科入院患者の入院を受け入れることである。COVID-19感染症の流行により、松沢病院は、これらの役割に加え、日中および夜間休日に発生した精神科への入院が必要なCOVID-19

陽性患者（疑い症例を含む）を受け入れること、他の精神科病院などで発生したCOVID-19感染症陽性（またはその疑い症例）の入院患者の転入院を受け入れること（クラスターの場合を含む）、という2つの大きな役割を新たに担うことになった。人員や病床といったリソースを増やすことが非常に困難な公立病院で、この難問にいかにか立ち向かったかが、本書には記載されている。

この難問に立ち向かうため、同院では体制面の大きな変更を行った。具体的には、結核病棟をCOVID-19に対応する専門病棟に転換したこと、身体合併症病棟の内科医師の担当を組み替え、内科医1名と研修医1~2名からなる「内科コロナチーム」を発足させたこと（当初3チーム、最大時には5チームに拡大）、3つあるスーパー救急病棟の1つで、保護室エリアの一部をCOVID-19対応病床にし、精神科医は全員がCOVID-19感染症に対応できる「オール精神科」体制を整えたことなどが挙げられる。そしてこの体制を支えるために、病院全体で、精神科医師、内科医師、産業医、看護師、精神保健福祉士、システム担当者など多職種がそれぞれさまざまな工夫や対応を行った。その結果が結実したのが本書である。

本書は2つの章に分けられ、第1章では、松沢病院におけるCOVID-19に対する上記のような工夫や対応について、18のセクションに分けて述べられている。その内容としては、まずは総論として、病院全体の対応の経緯と方針が、病院管理者、内科、精神科、看護部の立場から述べられ、ついで各論として、ICN（感染管理看護師）の活動（研修、感染対策、職員の健康管理など）、内科コロナチームの活動、精神科医の活動（精神科外来、COVID-19専門病棟）、身体合併症病棟における疑い症例への対応、精神科救急病棟における疑い症例への対応、認知症病棟における疑い症例への対応、精神科ソーシャルワーカーの活動、産業医による職員の健康管理、情報管理・伝達、他の精神科病院でのクラスターへの対応、医療・行政システムの課題が論じられている。続く第2章では、精神科病院での感染症対策一般について論じられている。

本書は、上述の通り、さまざまな職種による工夫や対応が記載されているため、重層的・多角的に、精神科病院におけるCOVID-19感染症対策について見渡すことができる貴重な書籍ということができよう。どのセクションを読んでも、きらりと光る臨床上のヒントがある。COVID-19感染症に対応する可能性のあるすべての精神科医にお勧めしたい。

(小原圭司)